



はじめに

大正 11 年（1922 年）と言えば、大正ロマンの頃、洋装が進み西欧文化を大いに取り入れ始めた時期。その頃に京都の青年有志がセーリングの魅力に惹かれ集結しました。しかもそれは単なる趣味の延長ではなく、西欧の優れた活動を取り入れ、日本における海洋スポーツを立上げ、国際進出を目標とする、さらに生活を豊かにし近代化にも寄与するのだ、という壮大な思いを共有しての社交とスポーツを合わせ持つ倶楽部の組織化でした。倶楽部結成の趣意書にはその思いが明確に記されています。琵琶湖ヨット倶楽部はこれらの素晴らしい大先輩によって築かれた歴史の延長で活動しています。

それから 100 年の年月が経ちました。その間、クラブ活動はメンバーの世代交代もある中、活発な時期、そうでない時期を繰り返し現在に至っています。

BYC には当時の資料が沢山残されており、80 周年の際に古い資料の電子化を始め、ある程度取りまとめたものを 80 周年記念 CD-ROM として編集し、配布いたしました。また 90 周年の際には、記念誌として 213 ページに渡る冊子を発刊すると共に、過去の貴重な資料をデータ収録した DVD を制作いたしました。この冊子は、BYC の創立からの歴史とその足跡をまとめた大変良い記録帳になりました。

これらの資料を再度振り返ると、BYC の素晴らしい先人達が残した足跡は正に日本ヨット界の黎明期を先導してきたと言えます。特に競技としてのヨットを海外の情報も得ながら作り上げてきた、その苦労がこれらの資料から読み取れます。また同時に、競技だけでなく、毎週末のセーリングを生活のサイクルとして楽しむ、心豊かな生活の糧としてのヨットクラブライフという独特な世界を戦前の騒乱の時代から作り上げてきたことも先人の偉業として捕えるべきであると思います。

今回 100 周年に当たり、記念誌の発刊はやはり必須です。相当荷の重い作業になりますが、重い腰を上げて編集にかかりました。コロナ禍で 100 周年行事が 2 年延期になりましたが、締めにかかります。本誌の編集におきましては、90 周年記念誌の記述をほぼそのまま流用して掲載させていただいています。必要な修正を行うと共に、その後の 10 年の主な動きを追加する形で掲載いたしました。また、前は来賓や会員の多くの祝辞やメッセージをいただき掲載しましたが、それは縮小し、今回は、BYC やヨットライフの在り方などのテーマを決めての各位の思いをコラムで語っていただくことで、BYC の次の 100 年を考えるネタ帳になればとの思いで企画・掲載しております。

記念誌という堅苦しいお決まりのものを作るのは全く本意ではありません。我々の足跡を振り返る中で、そういった気付きが生まれ、何気ない日常週末の営みにも、その意義が伝承されていることを感じていただけるのではと思い、ここに再度まとめるものです。お楽しみいただければ幸いです。

編集責任者（文責） 青木 英明

2024年9月吉日

ごあいさつ

創立 100 年を迎えて

琵琶湖ヨット倶楽部は 京都第一商業学校のボート部の有志が集い、琵琶湖畔に「日本ヨット倶楽部」の名称で発足、後に「琵琶湖ヨット倶楽部」と名称を変えました。そしてこの度、創立 100 年を迎えました。

ヨットクラブ発足間なしに、国際規格の A クラス・ディンギーを数艇建造、英国のヨットレースのルールブックを翻訳しています、またニス塗りの艇は、あかさたな・・・のひらがなで・・・あかつき、かすみ、さざなみ、なぎさと艇名を付けました。

これまで、大きい台風による艇庫の崩壊や 駐留軍による 艇の接収がありましたが、戦前ドイツより船図を取り寄せ 琵琶湖で建造した EZ 艇は BYC を代表するフラグシップ艇として、舟艇の補修に努め、今も 年 1 回のカインドレガッタで 帆走しています。

またこの船が縁で、オーストリーのヨットクラブと交流することになり、2 度にわたりアルプスのふもとの湖に遠征しました。

1969 年から開催してきました BYC、KYC、KSYC の 3 クラブ共催の「比叡レガッタ」は回を重ねて 50 回を超えました。今年は 琵琶湖ヨット倶楽部がホストで、9 月 8 日に開きます。当日はアフターパーティを琵琶湖ホテルで開き、100 周年の祝賀会とします。

早くには 100 周年記念祝賀会を外輪船ミシガンの船上での開催を計画しましたが、あいにくコロナの影響で断念しました。

「京都新聞主催 SAIL おおつ」を毎年、8 月最後の日曜日に開催してきました。時には新聞 1 ページを使ってレースの様態を載せて貰ったこともありましたが、しかし新聞社の主催が取りやめになり、3 クラブの共催になりました。あらゆる艇種が参加できるヨットレースは、着順を琵琶湖ナンバーで修正して、表彰してまいりました。

ヨット界も最近の風潮で、会員の増強が出来ず、高齢化する状況にあります。何とか若い世代への活躍の場となるようありたいものです。大学のヨット部との共催や ジュニアの育成など 課題を抱え、創立 100 年を迎えて ヨット界の発展に努めてまいります。



琵琶湖ヨット倶楽部

名誉会長 長谷川 和之

2024年9月吉日

ごあいさつ

創立 100 年を迎えて

まず皆様方には、琵琶湖ヨット倶楽部に対して日頃からご指導・ご支援を賜りますこと深く感謝し、御礼申し上げます。

特に、日本セーリング連盟、滋賀県セーリング連盟、京都府セーリング連盟の皆様方には、琵琶湖における活動推進のご指導を仰ぎながら共に協力関係で進めて来れましたこと、大変有難く感謝の気持ちで一杯です。

また、我々がここに存在することは、全て BYC の先人、大先輩の活躍があつてのことで、その大先輩への感謝を忘れることはできません。

近年の BYC は、世代交代もあり、メンバーが減少し、運営環境も大変厳しくなっており、変革を考えなければ生き残れない状況になりつつあります。組織には栄枯盛衰がつきものですが、BYC も例外ではありません。

振り返りますと、昭和初期の BYC の大先輩の果たしてきた功績は素晴らしいものがあります。特に、京都の青年有志が集い、大きな志を持って確立したのは、全くのプライベート組織でありながら、その思いは、スポーツの振興、国際化へのステップ、さらに生活環境向上をベースにした近代化を目指す活動です。その意欲は大志に満ち溢れていました。日本ヨット協会など全国的な組織を作り上げる過程にも BYC は大きな役割を果たしたようですが、クラブそのものはどこにも属さず、独立したプライベートの形態を続けています。この意気が BYC のアイデンティティなのではないかと思うところです。

第 1 回の「ビワコ・カインド・レガッタ」を 1973 年に開催し、以後毎年続けて来ました。1998 年からはスポンサーを得て「SAIL おおつ」に改名して継続しています。すなわちこのイベントも昨年で 50 周年となったわけです。このレースはディンギーなら誰でも参加できるヨットの普及を目的にしたイベントで、その後活躍した多くの選手がこのレースをきっかけに巣立っていきました。メンバーも減少する中、大それたことは出来ない状況ですが、かろうじて BYC の役割を果たしているのではないかと考えております。本年から大会の名称を「ビワコ・カインド・レガッタ」に戻しました。「懐かしい!」「お世話になった」という声が聞こえてきます。うれしいことです。継続は力なり、次の 100 年に向けても続けていかなければならないイベントです。

戦前に建造した EZ 艇 (SVARA 号) は建造 85 年になります。大先輩が残してくれたこの木造艇は我々の宝物です。また、この艇がきっかけで、オーストリアの湖にあるヨットクラブ「Union Yacht Club Mondsee」と友好関係になりました。本当に有難い限りです。

古い写真を見るとセーリングの背景の山並み(稜線)は 100 年経っても不変です。琵琶湖ヨット倶楽部は社交とスポーツを合わせ持つヨット好きが集まる、独自プライベートの組織です。100 年後も同じ山並みを背にセーリングしている光景を夢見るところです。



琵琶湖ヨット倶楽部

会長 青木 英明

2024年9月吉日